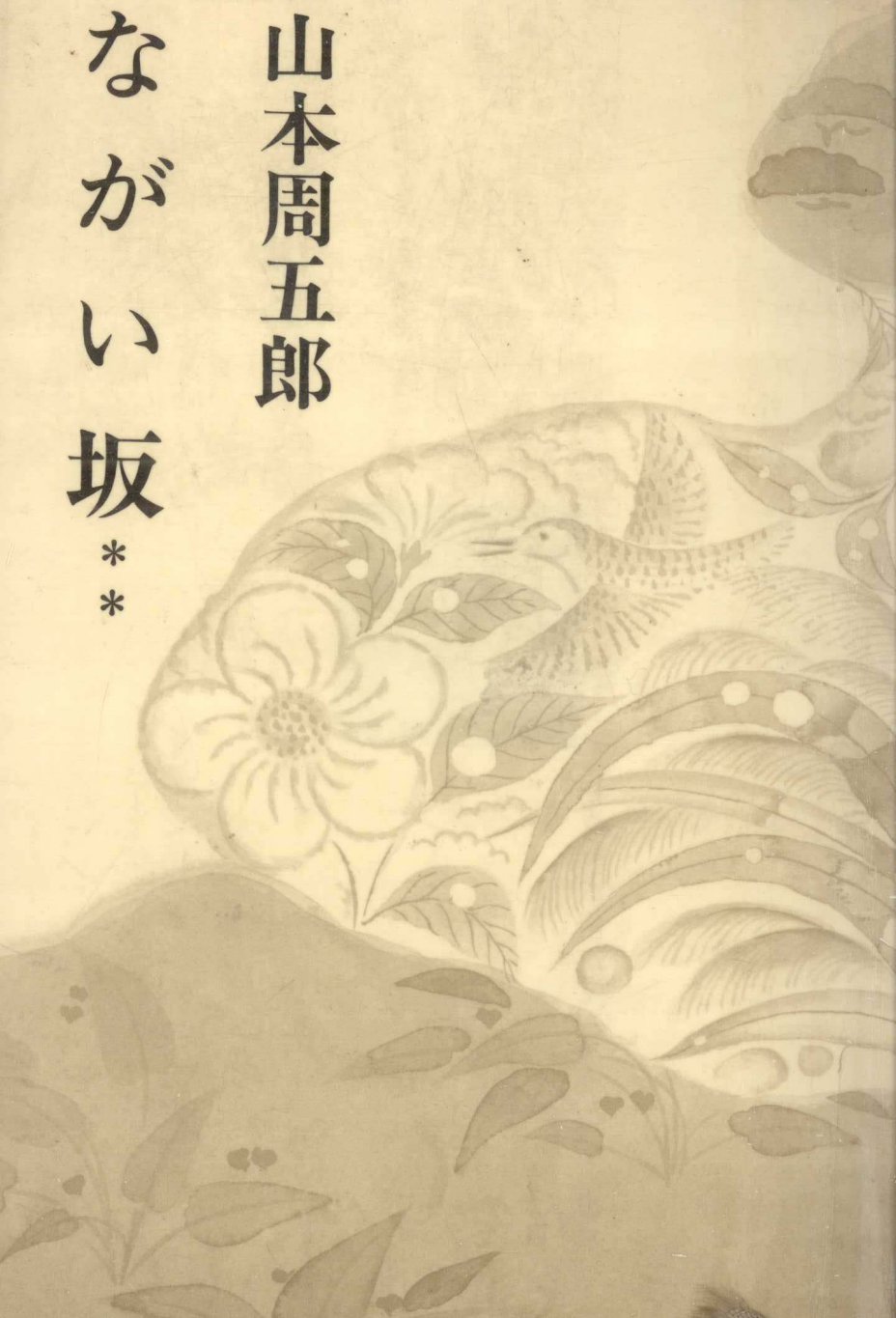


山本周五郎

ながい坂

*
*



ながい坂
**

山本周五

新潮社版

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1968



ながい坂 * * (山本周五郎小説全集20)

昭和四十三年一月三十日 発行
昭和五十五年八月十五日 四十四刷

定価一三〇〇円

著 者 山本周五郎

著作権者 清水きん

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本

発行所 株式會社新潮社

郵便番号 東京都新宿区矢来町七一六二

電話 業務部 東京(03)二六六一五二二一

編集部 東京(03)二六六一五四二一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

な
が
い
坂

*
*

梅の井にて

「この御城下のようすはだいぶ変ったな」と男の一人が飲みながら云った、「大水の出た年のようすとはどことなく変ったようだ、そうは思わねえか」

「おらもそう気がついた」と伴つれの頬ほ冠かむりをした老人が云った、「あの水害のあつた五年まえには、町の気分も穏やかでおちついたものだったよ、ああ、おらは水害のあと片づけに雇われて来たもんだが、富公がめつぼう遊び好きで、毎晩のように白壁町へかよい詰めた」

「富公よりじいさんのほうが先達せんただったんじゃねえのか」

「まあどっちでもいいが」と老人はうまそうに酒を嚙すって云った、「水害のあと片づけぐれえの仕事で、毎晩のように遊べたってことも有難かつたし、この町ちぜんたいが暢のんびりとおちついていて、治世ちせい泰平たいへいとはこんな土地のことを云うのかと思つたもんだ」

「その、ちせえなんとかつてのはわからねえが」と三人めの肥えた男が、しゃがれた声で云った、「そしてまた、五年まえのことはなんにも知らねえが、この御城下が、いまおかしなようすだつてことには間違いがねえ、なにがどうだと数えあげるんじやなく、ぜんたいにこう、——なんて云つたらいいか、その、ひなたにいて冷たい風に吹かれる、っていうような気分がするな」

「町の者がみんな、お互いに顔色をうかがっているみてえだ」と老人が云った、「物の値段も毎日のようにあがつたりさがつたりするし、錢不足で店を閉める小商人が軒並みだし、秋になつてから流行り病がひろがるし、なんだかしれねえが、いまにも大地震でも起こりそうな按配だぞ」

大造はお孝に酌をさせて飲んでゐた。

「ええ、あたしもう一生、独りでくらしめてゆくつもりです」とお孝は云つてゐた、「あの人に死なれてからこつち、人を好きになるのが恐ろしいんです」

「もう五年以上にもなるんだらう」大造はうわのそらできいた、「死んだ者に義理を立てるのも際限がある、いいかげんに諦めて、あんまり老けねえうちに嫁にいくんだな」

「義理を立ててるんじゃないやありません、誰に限らず人を好きになるのがこわいんです」

「城下町の氣風は」と向うで肥えた男が云つた、「どこでもそうだが、城下町の氣風はその藩の、家中の動きに左右されるものだ、町の中がおちつかず、なにか浮き足だっているようにみえるのは、大きな声じゃあ云えねえが、御家中に穏やかでねえ事が起こってるんじゃないやねえか、おらにやあそう思えてならねえ、そうじゃねえかと思えるふしがあるんだ」

大造はあたりを見まわした。店の中にはその三人のほか二た組、一人と四人づれの客があり、その六人もひそかに、三人組の客の話を聞いているようであつた。大造はお孝に、ちよつと、と云つて立ちあがり、三人組のほうへ近より、すぐには話しかけず、三人の顔を順に、好戰的な眼で一人ずつ眺めまわした。

「おめえらだな」やがて大造が云つた、「この城下のあつちこつちで、妙な噂をしやべりまくつてゐるのは、そうだらう」

三人は黙つてゐた。

「どこのなにもんだ」と云って大造は飯台を力いっぱい叩いた。大きな手で力いっぱい叩いたら、音も大きかったし飯台の上の徳利や皿小鉢がはねあがった、「おめえらどこのなにもんだ、なんのためにおかしな噂をばら撒くんだ、返辞をしろ」

「まあまあ」と頬冠りをした老人がいった、「そんなにどならねえで下せえ、親方、おまえさんはなにか感ちげえをしている、おらたちは渡り人足でなんにも知らねえ、噂話はおらたちがばら撒いたんじゃない、おらたちは噂話を聞いたほうだ、妙な噂を聞いたから、どうしたわけかと話していたんだ」

「ちよつと待った」と肥えたしゃがれ声の男が片手をあげて云った、「たいそう高い口をききなさるが、おまえさんこそなに者だえ、町方のお役人でもあるんかえ」

「御材木奉行のお手先よ」大造は即座にやり返した、「お止め山ゼんたいの森番で、名は大造というもんだ」

「おらは房州、これは金助」と老人は肥えた男に頷き他の一人に頷いた、「それからそっちが伝、みんな堰の工事で働いてるだよ」

「これからもそこで働いていてえなら」と大造が少し声をやわらげて云った、「つまらねえことを饒舌りあるくんじゃねえ、おらあ山係りだからいいが、町方役人の耳にでもへえつたらしょっぴかれるぞ」

それは見当ちがいだ、妙な噂はこの町の者たちが弘めているんだと、肥えた男が云い、房州という老人が制止して、大造におじぎをし、これからは気をつけるからと詫びた。大造は暫く三人の顔を眺めてい、それから自分の席へ戻った。他の二た組の客のうち、四人伴れのほうが勘定を出て出てゆき、それを送り出したおそめという女が、大造の側へ来て腰をかけた。二十四五歳に

なる固^{かたもと}太りの女で、両のこめかみに梅干^{うめぼし}を貼りつけていた。

「お孝ちゃんはいまお爛^{かん}直しにいったよ」とおそめが云った、「あいつら」とおそめは声をひそめた、「どここの馬の骨だかわからないけれど、いつもここへ来ちゃあへんなことばかり話してるんだよ、わざと人に聞えるようにさ、親方が云ってくれたんで胸がすつとしたわ」

「おめえも土地の者か」

「三年ばかりよそへいってたけれど、生れて育ったのはここよ、町はずれの百軒^{ひゃくけん}つてところ、知らないだらうね親方なんぞは」と云っておそめは太息をついた、「貧乏人ばかり集まったごみ溜^{ごみど}みたような、臭くってきたくないぶつ毀れ長屋、そこで生れてそこで育ったのよ」

お孝が酒を持って来、おそめは立って、大造に笑いかけてから、一人伴れの客のほうへ去った。「あたしはらはらしちゃったわ」お孝は大造に酌をしながら囁^{ささや}いた、「あの人たちに構^{かま}わないで、あの太った人は喧嘩^{けんか}が強^かくって、いつかもこのお店の外で三人と殴^{なぐ}り合いをしたわ」

「うさん臭え野郎どもだ、なにかこんたんがありそうに思えてならねえ」

「いいわよおじさん、たまに山からおりて来るんですもの、そんなこと気にしないで、ゆっくりお酒をたのしむことだわ」

「岩さんて人は来るか」と大造は酒を啜^{すす}りながらきいた、「町人みてえな恰好^{かっこう}をしたお侍の人よ」「ええ、ときどきね、——あの方^{かた}はんとにお侍さんなんでしょうか、このまえなんか酔^よっぱらって、その土間へ寝たつきり動^{うご}かなかつたのよ、大きな声で唄^{うた}をうたったり、わけのわからないことをどなりちらしたりして、まるで流れ者のやくざみたようだったわ」

「なにかわけがあるんだらうよ」と大造が考えながら云った、「あの人はお侍にちげえねえし、お侍となるといろいろ、おらたちには察^{さつ}しもつかねえような、役目のうらおもてがあるらしいか

らな、ま、そつとしておくんだな」

「おじさん今夜は酔わないのね」

大造はなにか云いかけたが、髭だらけの頬を掻き、頭を横に振った、「酔ってるさ、いい心持だ、お侍には酔いつぶれても体面がありお役目もあるが、おらたち山の者は身軽だからな、——尤もこんどの小屋頭が気にいらねえひょっとことから、山へ帰るのがいつもおっくうになっていけねえ、もとの平作ってえ小屋頭はいい人だった、おらとはまるできょうでえみてえにしていたもんだ」

「その人、どうかすったんですか」

大造は答えずに眼をつむり、すっかり灰色になった頭を、ゆっくりとまた左右に振った。

十六の一

主水正がくぬぎ林の中で、くぬぎの落葉の舞うのを眺めていると、その男が静かにあゆみ寄つて来た。林は半ば裸になり、枝に残った葉が、風もないのにしぜんと枝からはなれ、ゆっくりと左右におよいだり、円を描いたりしながら舞い落ちるのであった。植えてから十年あまり、くぬぎは幹も太くなり丈も伸びている。三十本あまりの内、枯れたのが五六本もあったが、弥助がすぐに若木を植え直したので、主水正の望みどおり、いまでは素朴なやまがのふぜいをあらわしていた。母屋とその林とのあいだには、芒がひろく茂り、野茨がところどころに蔓を伸ばしている。芒の穂はほおけ、葉は茶色に枯れ、野茨の蔓には小さな紅い実が付いていて、小鳥が二三羽、その実をついばんだり、急に飛び立って芒の中へ見えなくなったりした。

「弥助、——おまえにこのけしきを見せたかった」と主水正は呟いた、「おまえには私がなにを欲しがっているか、こまかいところまでよくわかってくれた、石ひとつ入れず、池も掘らず、私の考えていた自然のままの、少しの気取りもない野末のけしきを作ってくれた、芒の中を曲り曲り来る小道も、そこに撒かれたまばらな小石も、すべて私の望んでいたとおりだ、これらはすべて一寸も動かさない、私の生きている限りこのままにしておこう」

どんなに費用をかけ、贅をつくして造った庭も、このけしきには遠く及ばない、弥助はとし老いた身で、誰の助力もかりずにこれを作った。そして弥助が死んで二年めになるいま、主水正は空想したとおりの、殆んど望みどおりの景色の中で、くぬぎの落葉する音に聞きほれているのであった。そこへ、その男があらわれたのだ。

男は継ぎはぎだらけの、垢じみた、腰きりの半纏に、よれよれの細帯をしめ、素足に草鞋をはいていた。腕組みをした太い手も、裸の脛にも黒い毛が密生してい、それが肉の厚い、遅しい、軀つきによく似合って、若い野獣のような精悍さを示すようにみえた。両の頬から顎まで、黒い剛毛に掩われた顔は、眉が太く、眼がするどく、左右の耳が大きく張っており、総髪のまま一と束ねにした頭の毛も、いま藪からとびだして来た毛物のように、ばらばらに乱れていた。——男がどこから庭へはいって来たのか、主水正にはわからなかった。落葉を踏む音がつき、男が近づいて来るのを黙って見ていた。男は少しのためらいも遠慮もなく、まるで自分の庭をあるいているような、おちついた、しっかりと足どりで来て、十尺ほどのまをおいて立寄り、するどい眼を細めて、じっと主水正の顔をにらんだ。ほぼ二十拍子ばかり、二人はなにも云わずに、相手の顔をみつめあっていた。

「いいつらだ」とやがて男が云った、「あなたが三浦主水正だな」

主水正はかすかに頷いた。

「おれは七日間、あなたの出入りを見ていた」と男は続けた、「評判どおりの人物かどうか知ったのでね、——あなたは気がつかなかったようだな」

主水正は唇をちよつと曲げただけであった。男の乱髪の上に、くぬぎの落葉が一枚ひっかかり、男はそれを払いのけながら、一瞬間も主水正から眼をはなさなかった。

「あなたはむつとりやだな」と男は云った、「いつかあなたは江戸屋敷へ来たことがある、二年か三年いたかな、七八年まえだったろう、おれはまだ十九か二十で、あなたのことなんぞにはなんの興味もなかった、田舎侍がなにか勉強をしに來た、氣むずかしいむつとりやだ、あれがその男だと教えられて、幾たびかあなたの姿を眺めたものだ、評判どおりそつけない、ぶあいそな顔つきで、江戸屋敷の者とはついに誰ともなじまなかった」

主水正は肩にふりかかる落葉を払った。三十一歳になった彼の顔は、陽にやけて黒く、眼尻に皺が刻まれ、額にも三筋の皺がはっきり刻まれていた。けれども彼の表情は少しも動かず、男を見返す眼にも、好奇心のようなものさえあらわさなかった。主水正は口をつぐんだまま、小さな腰掛に掛けていた。その腰掛も弥助の作ったものであり、よく枯らした榿材で出来ていて、一人分しか掛ける余地はなかった。

「うん」と男は唸ってからきいた、「あなたはおれが誰だか知りたくはないのかね」

主水正は冷やかに首を振った。

「どうして知りたくないんだ」

主水正は低い声で答えた、「私はあなたを招いたわけではない」

男は白い齒をみせ、「ああそうか」と大きく頷いた、「ようやくお言葉が下がったわけか、話を

してもいいかい」

主水正はなんとも答えなかった。

「お許しを得て安心した、そこで初めに忠告しておくが、あなたは首を覘ねらわれている、三浦主水正の首を掻くために、五人の者がまもなくこの城下へ来る筈だ」

主水正はこんども無言だった。

「信じないんだな」と男が云った、「五人の刺客が来ると云えば思い当る筈がな」

「その次を聞きましょう」

男は意表を突かれたように、ちょっと口をあき、それから唇で微笑した。

「城代家老の交代だ、そして第三は、堰の工事が廃止になる、大きなところだけで以上三件、ほかにもこまかい事はいろいろあるが、いま云った三つのことだけで、なにが起ころうとしているか察しがつくと思う」

「あなたが誰だか、まだ私は聞いていない」

「おれが誰であろうと、いま云ったことに変りはないんだ」

主水正の眼が静かに光った。男はじれったそうに片手を振った。

「いいだろう」と彼はやむを得ないといったげに肩をすくめた、「大事なのはおれが誰だかではなく、おれの云った事実のほうなんだ、必要のない限り名などは披露ひろうしたくないんだがね、あなたがそうこだわるのなら」

「いや」と主水正が遮さぎった、「云いたくないのならそれでいい、私もかくべつ姓名にこだわっているのではない、しかし、ただ風の送ってきた噂のようなことを、そのまま私に信じさせようというのはむりだろうな」

「首を斬られてからなら、信じるか」

「もう帰るほうがいい」と主水正が云った、「家の者がこっちへ来るようだ」

「大沼の上にある紅葉橋を知っているな」と男は云った、「橋の向うに白鳥神社というのが、明晩およそ酉の刻にそこで会おう」

「なんのために」

「来てみればわかるさ」男は立ち去ろうとして振り返り、「おまえさんには失望したよ」と無遠慮に云った。

茶と菓子いぬぎの盆を持って、芒の中の小道を芳野が近づいて来た。芳野は男を見たらしい。男はくぬぎ林の中を、もと来たほうへゆっくりとあゆみ去った。その姿が芳野の眼についたことは慥かだ。けれども芳野は、まったく気づかなかったように、側へ寄って来、持っている盆を腰掛の端へ置いた。

「小出と仰しゃる御老人がおみえでした」芳野は跣かかんで茶を注ぎながら云った、「御存じの方でございますか」

主水正はその名を思いだすのに、ちょっと暇がかかった。そしてやがて、私の先生だ、と領いた。

十六の二

芳野は主水正に茶をすすめ、菓子鉢の蓋を取った。

「私の少年時代の先生だ」と主水正は茶碗ちawanを手に取りながら云った、「待っていらっしゃるのか」

「お庭だからと申上げましたら、こちらへ来ると仰しゃいましたそうで、いま杉本さんが案内していらっしゃる筈です」

それは失礼だった、呼びに来ればよかったのに、と主水正が云った。取次に出たのは杉本さんで、わたくしはお茶の支度をしていましたから、と芳野は弁解した。

「お客間で御接待をなさいますか」

「あとで知らせよう」と主水正が云った、「これでは狭いから、誰かに床几しょうぎを持って来させてくれ」

芳野が去るのと殆んどいれちがいに、杉本大作が小出方正を案内して来た。小出は六十歳を少し出たばかりの筈だが、見ちがえるほど老けたし、軀も小さく、痩せちんだように感じられた。主水正は立ちあがって迎え、小出を腰掛こしかけに掛けさせた。

「そんなに鄭重ていじゆうでは困る」小出は主水正の挨拶あいさつを遮って云った、「領内測地の御用が終ったどうかがい、お祝いを申上げようと思って、ちょっと寄っただけです、どうか構わないで下さい」

主水正は床几のことを杉本に告げ、杉本は承知して去った。

「あなたらしいな」小出はくぬぎ林を眺め、しきりに舞う落葉に眼をとめた、「いかにもこれはあなた好みの庭だ、谷さんがいたじぶんには、むやみに石燈籠いしどうろうやなにかが、ごたごたうるさく並んでいましたかな」

「ここへおいでになったことがあるのですか」

「ごくたまにでした、それも二度か三度くらいでしょうかな、あのころの谷さんの颯爽さつそうたる姿は忘れられません」

杉本が床几を持って来て据え、主水正はそれを小出方正の斜めに置き直して掛けた。杉本はな

にか用があるかというふうに見、主水正の表情を読み、会釈をして去った。

「私はこのごろおめにかからないのですが、すっかりお丈夫になられたそうですね」

「いちじは重態で、医者も余命を気づかしたそうですな、私は知りませんでした」と小出が云った、「その病気が恢復し、お子たちを儲けられてから、人が違ったようになられ、いまでは酒も断ち、熱心に私塾で教鞭をとっていらっしゃるということです」

「お子たちというと、一人ではないのですか」

「女のお子について、去年また男のお子が生れたと聞きました」

主水正は急に眼をそらし、どこか痛みでもするように、つよく顔をしかめた。花木町の家のことを思いだしたのだ。

「今日はなにか」と主水正は話を変えた、「私に御用でもあったのですか」

「用事というほどのことでもないが、御実家の阿部さんにある蔵書のことと、ちょっと」小出はふところ紙を出して涙をかみ、その紙を丁寧にあたんで袂に入れた、「詳しい事情はわかりませんが、あの書物が少しずつ売られているようで、あれだけのものがばらばらになるのはもったいない、揃っていてこそ阿部家の蔵書として価値もあり、役にも立つというものですから、できることなら散逸を防ぎたいと思うのですが」

「ああそのことですか」主水正は困ったといったげに頭をさげた、「私もずっとまえから気にかけていたのですが、阿部では金に替えたいようすですし、私には纏まった金を出すほどのゆとりもないものですから」

小出方正は頷いた、「私も藤明塾か尚功館で、買取ることができないかどうかと、あちこち当たってみたのだが、それが耳にはいったものかどうか、阿部さんのほうは金高を上げるばかりで、

どうにも話がまとまらないのです」

「もっともいい方法は、藩の御文庫へ納めることだと思いました」と主水正は云った、「しかし阿部が欲にかられたとなると、ただ納めるだけでは承知しないでしようし、さればといってお手許金を下げていただくわけにも、まいりません、あの藏書の散逸を防ぐには、殿のお声がかりで召上げを仰せつけられる、という手段しかないと思います」

「あなたの力で、なんとか穏便なはからいができないものでしょうか」

主水正はかすかに首を振った。いつか年の暮に、小四郎が金を借りに来てから、もう五年以上も阿部とは往来が絶えている。こっちも役目が多忙で、身心ともに暇がなかったし、たとえ暇があったとしても、たずねてゆく気にはならなかったであろう。藏書のことなども、いまでは関心がない。小出方正に指示されて、少年じぶんからしらべられるだけしらが、しやうれきまどん「拾磔紀聞」のほかに数種の記録書を除けば、いままら散逸を防ぐ手段をとるほど、貴重なものはないといつてよかった。

おれはいまそれどころではないのだ、と主水正は思った。つい先刻、正体不明な男から聞いた言葉が、彼のあたまでしだいにふくれあがり、形容しようのない大きな力で彼を圧倒していた。男の云ったことが事実そのままでないとしても、江戸屋敷から来た人間だという慥かな裏付けがあるし、かなり高い身分だという察しもつく以上、三カ条については対策を立てる必要があるだろう。五人の刺客が来るということはべつだ、それは自分ひとりの問題であり、現実当面してみなければ手の打ちようがないからだ。——しかし他の二カ条は、と考え進めていって、主水正は息をのんだ。城代家老の交代も、堰堤かきど工事の廃止も、藩主飛騨守の意志なしではおこなえないことだし、もしもそれが飛騨守の意志だとすれば、どんな対策を立てても効果はないだろう。